三　善徳寺建造物の概要と変遷

伽藍と建造物

城端地区は山田川と池川の二つの川によって形成された河岸段丘上に位置しており、南北に長い町域を形成している。その中で、善徳寺は中央部の西端に東面して建っている。山号を「廓龍山」と号し、浄土真宗寺院らしい境内配置を取り、その建築物の中で、山門・本堂・鐘楼・太鼓楼の四棟が富山県の有形文化財に指定されている（平成五年八月一八日指定）。それ以外の式台門（菊の門）・式台・中式台・台所門・道場門（高桑門）・新講堂・対面所・大納言の間・西の書院・北の書院・庫裏・御殿・竹の間・御広敷・新御殿・茶室（廓龍庵）・経蔵の一七棟は南砺市の有形文化財に指定されている。

建築の歴史

善徳寺は永禄二年（一五五九）、城端の豪族、荒木大膳の招聘をうけて現在地に移ったと伝えられているが、一八世紀中期に本堂を建て替えるまでの細かな建設活動は不明である。寺に残されている文献等から、慶長九年（一六〇四）に加賀藩主前田利長が大納言の間に二泊したことや、寛永一〇年（一六三三）に御堂を再興した、との記述が見てとれるが詳細は明らかではない。享保一一年（一七二六）に描かれた「城端町絵図」（市指定文化財）には、間口五間の建て替え前の本堂・太鼓楼・式台・対面所・大納言の間・最初の庫裏・鐘楼・台所門・薬医門形式の山門が描かれている（図1）。

本堂は寛保二年（一七四二）に建て替え許可願が出され、延享三年（一七四六）から建設が始まった。宝暦九年（一七五九）に本堂が上棟した後は、宝暦一二年（一七六二）に鐘楼を砺波郡島村（現在の小矢部市）乗永寺に移築し、明和八年（一七七一）から新しい鐘楼の建設に着手した。天明元年（一七八一）に鐘楼が上棟したころには、飢饉の連続や住職のいない無住時代に入るなどの悪条件の中、寛政一二年（一八〇〇）から山門の建設に取りかかっている。その後、文化一二年（一八一五）に山門が完成すると建設活動はしばらく途切れている。なお、以前の山門は、享和元年（一八〇一）に苗加村（現在の砺波市）万福寺へ移されている（富山県指定文化財）。

嘉永元年（一八四八）まで無住状態にあった善徳寺であるが、翌二年、加賀藩第一三代藩主前田斉泰の一〇男である亮麿を住職に迎え、加賀藩の援助の下、北側に寺地を広げ、式台門や御殿、御広敷などの居住部分を拡充した。また、安政元年（一八五四）の蓮如上人三五〇回忌に向けて庫裏の増築に着工した。この庫裏は安政二年（一八五五）に完成し、入母屋屋根の式台と唐破風の玄関がついた間口の大きいものとなった。しかし、二〇年程度で台風によって壊れ、明治初期に現在の形に改築された。

亮麿は嘉永四年（一八五一）に四歳で没し、一七世住職には本山から厳高が迎えられた。明治四年（一八七一）には、その厳高の元へ加賀藩主前田斉泰の娘である治姫が許婚者として入寺しており、加賀藩との強い繋がりは保持していた。しかし、明治六年（一八七三）、厳高が死去し、治姫は東京へ引移しとなった。以降は、嘉永期に形成した大伽藍を継承しつつ、小規模な増築や既存建物の改修等を行っており、明治二一年（一八八八）には経蔵が上棟され、明治後期には参拝者の詰所・宿泊所となる香部屋や研修道場等の前身が建築された。

昭和期に入り、元の「茶所」の機能をもつ、現在の「善徳寺会館」が建設された。昭和四〇年代には香部屋や研修道場も民藝調の建築に大改修され、昭和五八年（一九八三）には宝物収蔵館を建設したほか、何度か小規模な改修を行っているが、創建以来一度の火災にも遭わず、現在に至っている。

現在は、親鸞聖人七五〇回御遠忌・教如上人四〇〇回忌法要に向けて、本堂の緊急震災対策事業、庫裏・台所門の保存修理事業を行っている。

境内配置の変遷

善徳寺を構成する諸建築については、これまでさまざまな調査や研究が行われているが、平成六年に行われた金沢工業大学の土屋敦夫教授（当時）の「善徳寺の建築物及び絵図面の調査」が現在も指標となっている。各時代の絵図面の検証とそれを基にした建築物の調査であり、初めて境内建築物の変遷を網羅した調査である。今回、これに新たに発見した絵図や記録資料を加え、それらに各建造物や部屋等がどのように描かれているかによって、増改築や修復の流れを把握し、改めて配置の変遷をまとめた（図6）。

使用した絵図は九点で、詳細は表1のとおりである。なお、時代によって建物や部屋の呼称が異なっており、例えば現在の「庫裏」が、絵図では「台所」となるような事例があるが、本書では現在の呼称を基本として記載した。

主要建築物建築年代	絵　図　面	絵図面の時期	本書での掲載
	城端町絵図	享保11年（1726）	写真図版・図1
	善徳寺境内図（善徳寺絵図）	寛保年間（1741～1743）	口絵
1759　本堂上棟	御坊平面図	寛政年間（1789～1800）	写真図版
1781　鐘楼上棟	善徳寺境内絵図（配置平面古図）	18世紀末	口絵
1801　旧山門譲渡	城端御坊全景図（伝宝暦年中）	推定（1809～1850）か	写真図版
1815　山門完成	城端御坊全景図（伝嘉永年中）	嘉永年間（1848～1853）	口絵
1850　式台門完成	御屋根惣絵図（屋根葺替絵図）	安政～文久年間（1854～1863）	口絵・写真図版
明治初期　庫裏改築	善徳寺境内絵図	明治28年（1895）	写真図版
1888　経蔵上棟	明治平面図	明治中期以降	図2

表１　絵図の名称と年代

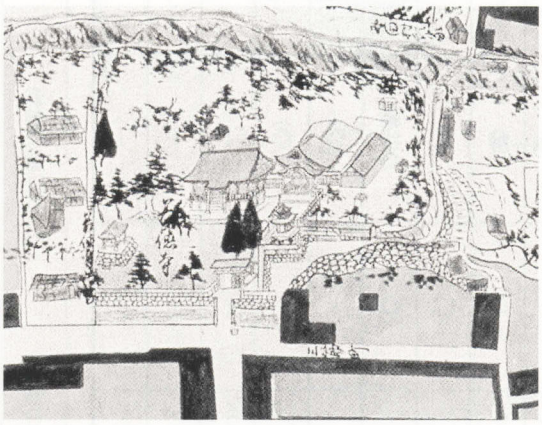


図１「城端町絵図」善徳寺部分拡大

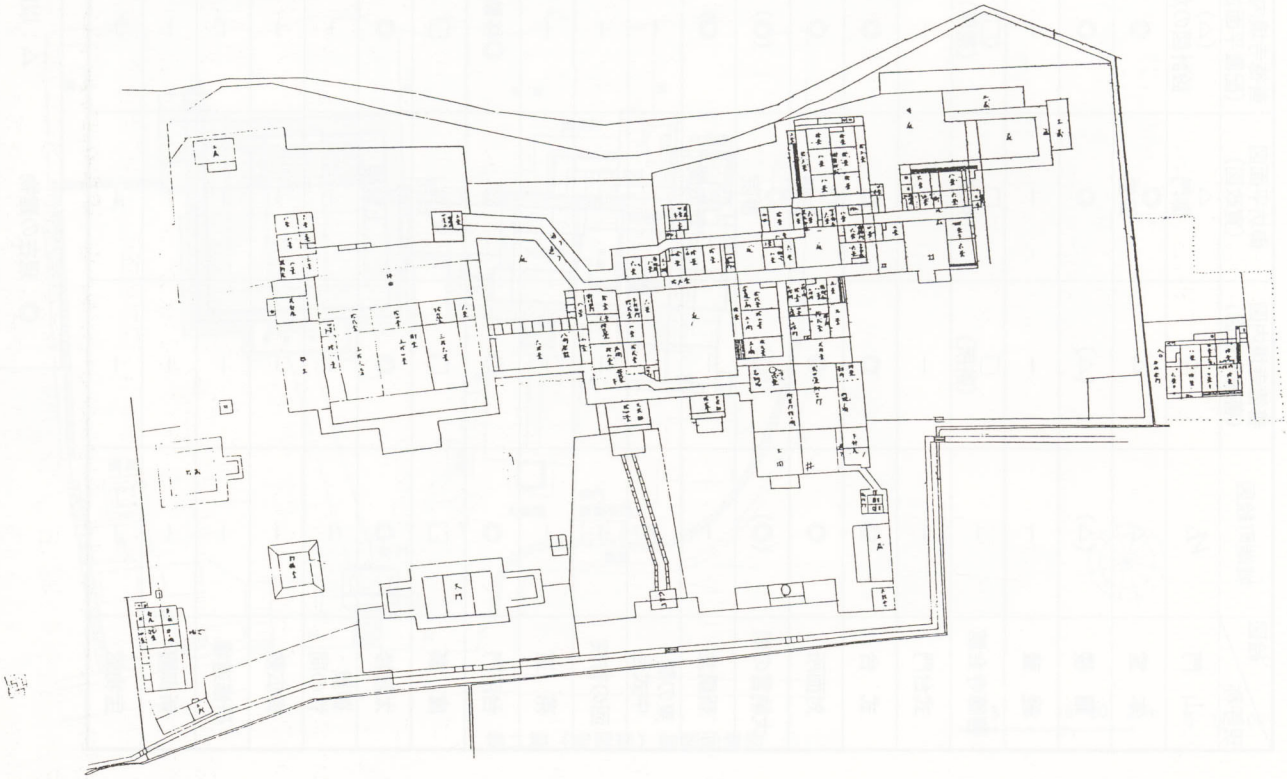
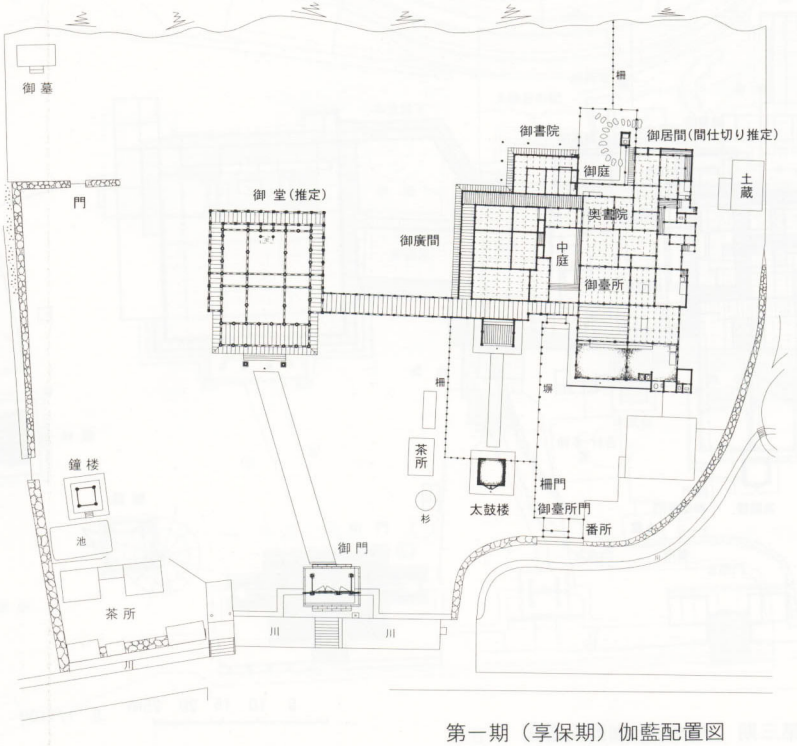


図２　明治平面図（今回調査では確認出来なかった）

表2　諸建築と絵図の関係

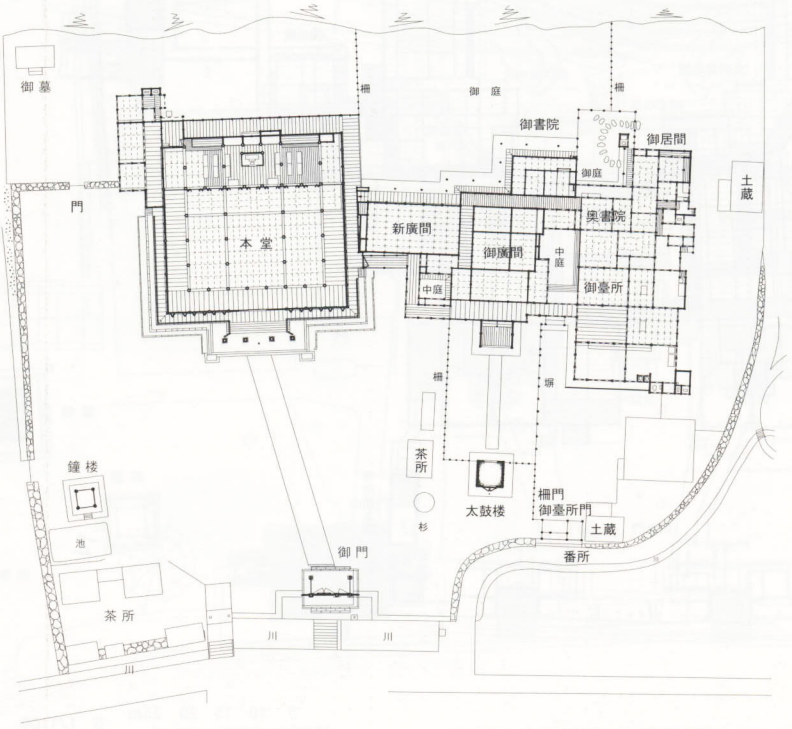
絵図／現呼称	城端町絵図	善徳寺境内図（善徳寺絵図）	御坊平面図（寛政図）	善徳寺境内絵図（配置平面古図）	城端御坊全景図（伝宝暦年中）	城端御坊全景図（伝嘉永年中）	御屋根惣絵図（屋根葺替絵図）	善徳寺境内絵図（明治28年図写）	明治平面図（今回は未確認）	現　在
山　門	△	△	△ 御門	（△） 設計図のため	◎	◎	◎	◎	◎ 大門	◎
本　堂	△	△	◎ 御堂	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
鐘　楼	（△）	（△）	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
経　蔵	—	—	—	—	△	△	（△）	◎	◎	◎
善徳寺会館	—	□ （茶所）	□ （茶所）	（□） （茶所）	□ 茶所	△ （茶所）	（△） （茶所）	△ （茶所）	△ 茶所	◎
式台門	—	—	—	—	—	◎	◎	◎	◎	◎
式　台	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎増築	◎	◎	◎
対面所	◎	◎	◎ 広間	◎	◎	◎	◎増築	◎	◎	◎
大納言の間	（◎）	（◎）	◎ 書院	（◎）	（◎）	（◎）	◎移動	◎	◎	◎
新講堂	—	—	◎ 新広間	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
東の間・中式台	—	—	—	—	—	—	—	◎	◎	◎
西の書院	—	—	—	—	—	—	—	◎	◎	◎
茶　室	—	—	—	—	—	—	—	◎	◎	◎
台所門	◎	◎	◎	◎移動	◎	◎	◎	◎	◎	◎
庫　裏	□	□	□ 台所	□	□	△	△ 台所	◎	◎	◎
太鼓楼	◎	◎	◎ 上鞍楼	◎	◎	◎移動	◎	◎	◎ 太鼓堂	◎
御殿・竹の間	—	—	—	—	—	（◎）	◎ 奥御殿	◎	◎	◎
御広敷	—	—	—	—	—	（◎）	◎ 御城敷	◎	◎	◎
研修道場	—	—	—	—	—	—	—	—	—	◎
新御殿	—	—	—	—	—	—	—	—	—	◎
宝物館	—	—	—	—	—	—	—	—	—	◎

◎：現在の建物　△：以前の建物　□：△以前の建物　（　）：推定



5 10 15 20 25m S 1/1100

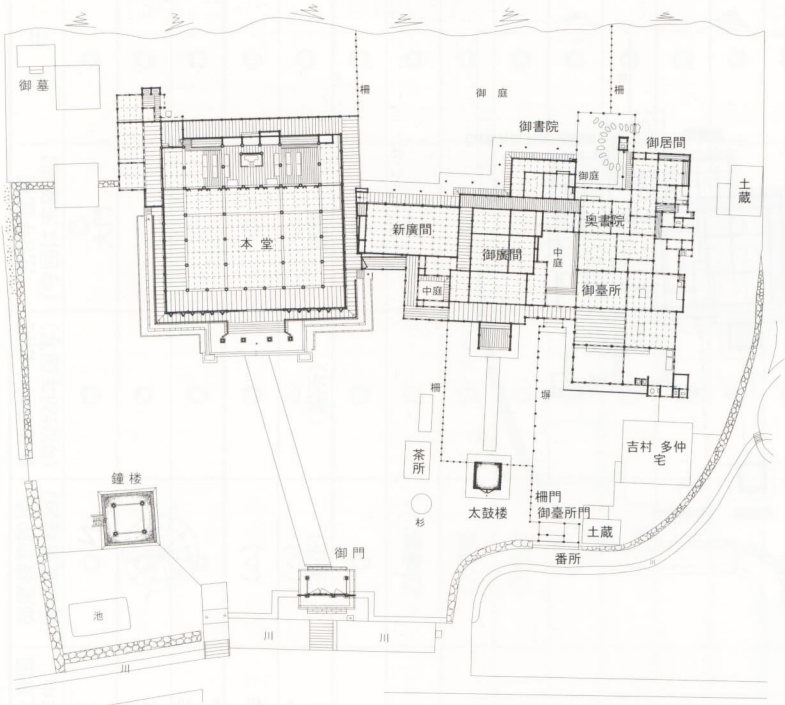
第一期（享保期）伽藍配置図



5 10 15 20 25m S 1/1100

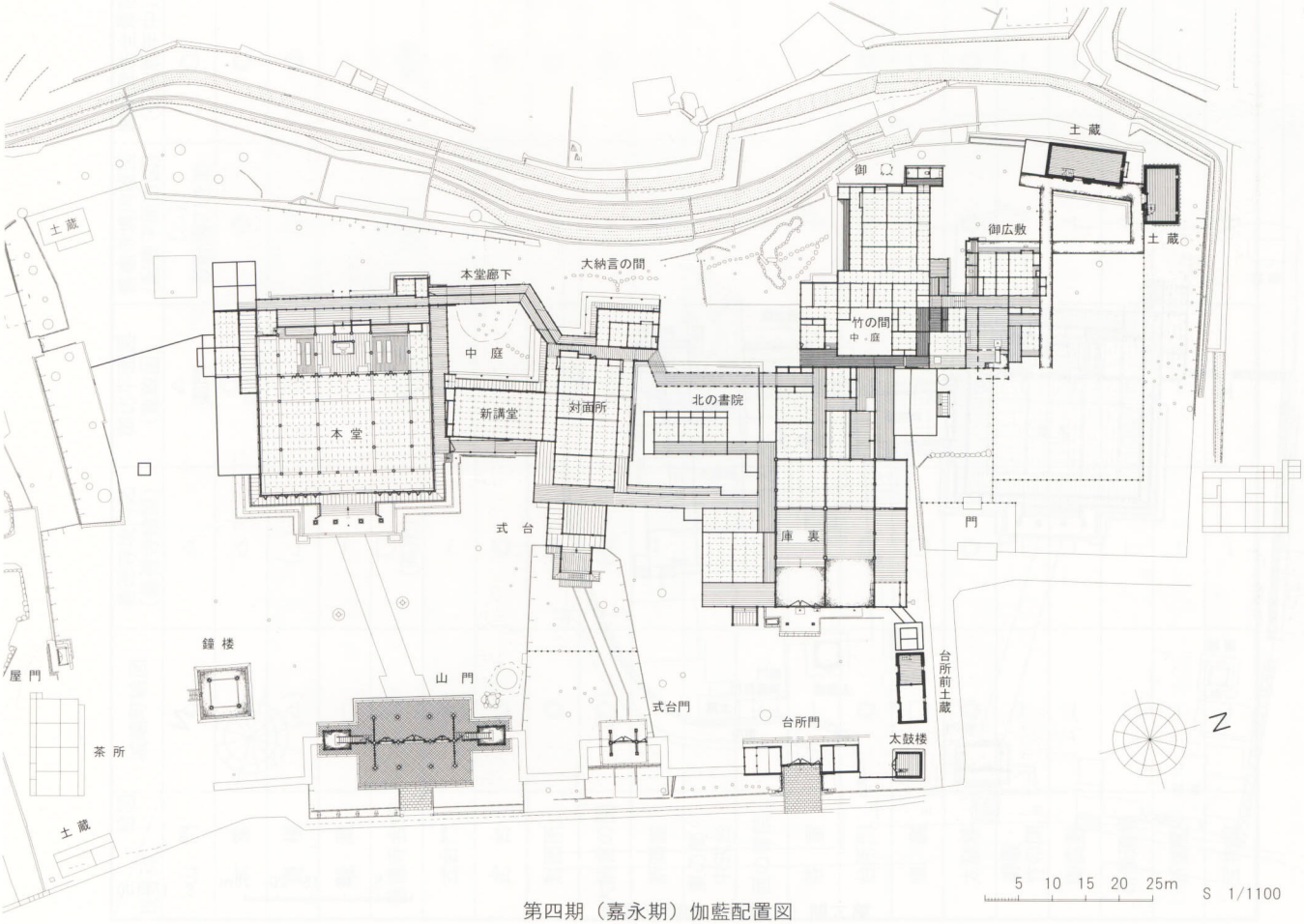
第二期（宝暦期）伽藍配置図

図3　時期別伽藍配置図（1）　（※各建物・部屋の名称は絵図等を元に記入）



5 10 15 20 25m S 1/1100

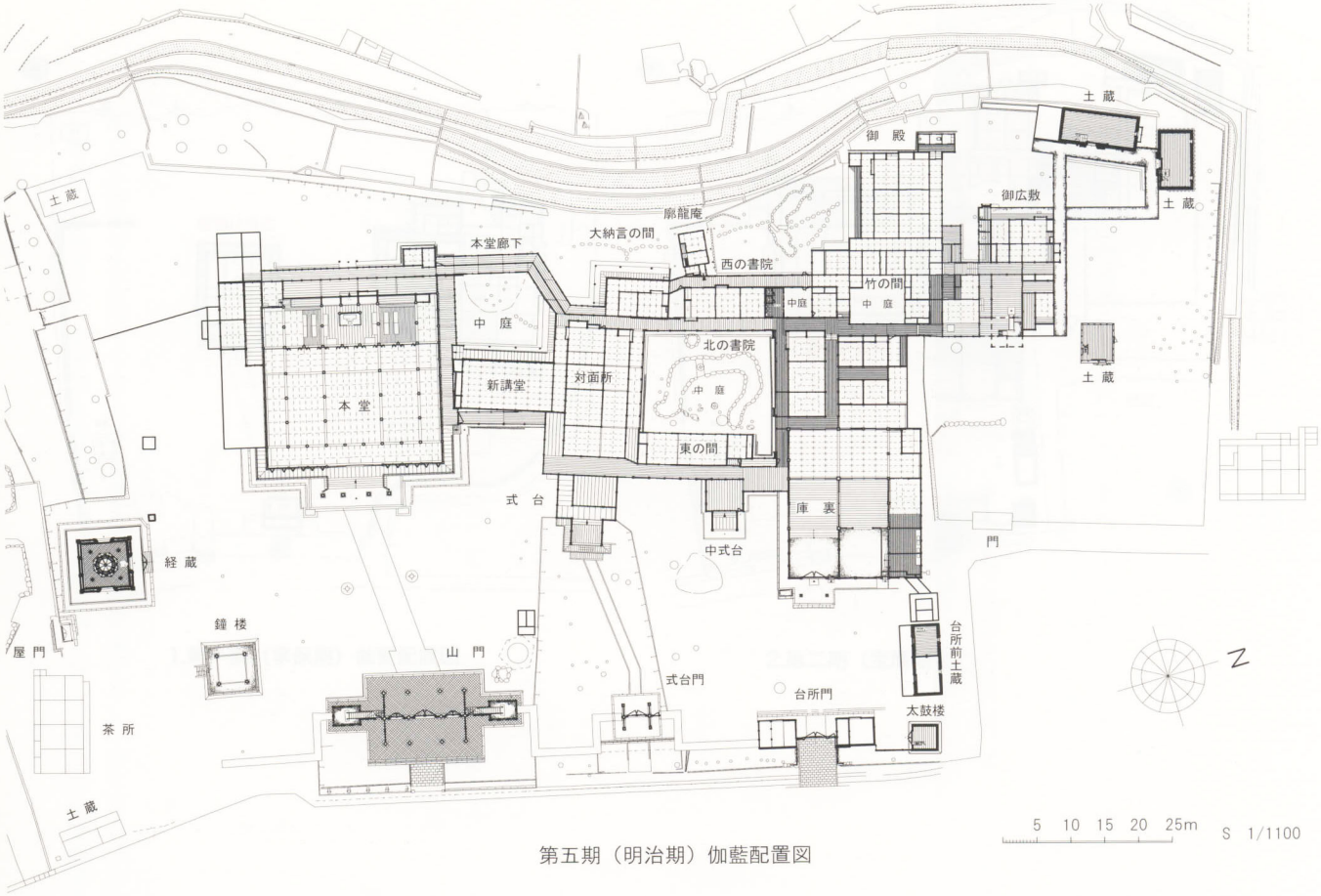
第三期（寛政期）伽藍配置図



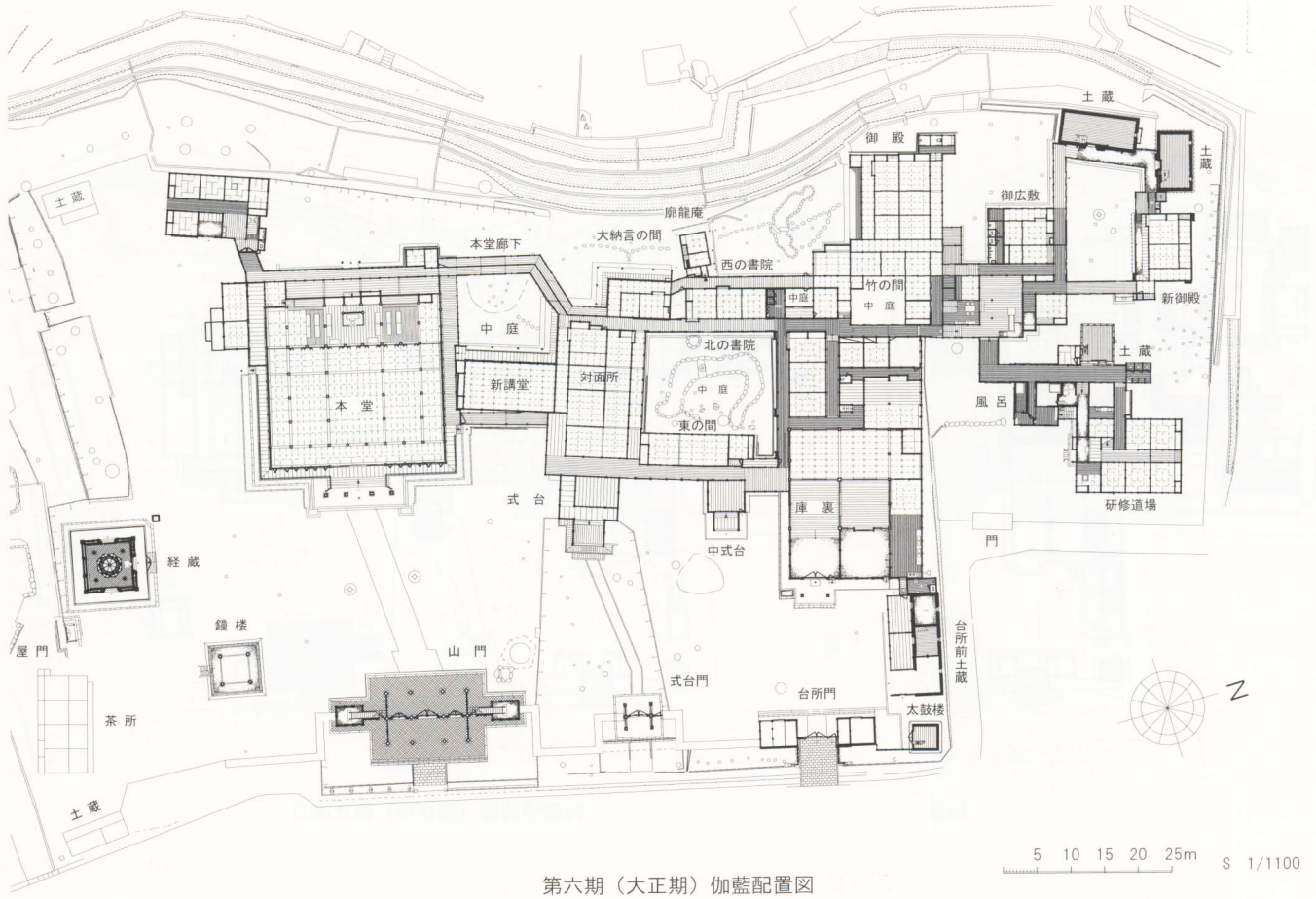
5 10 15 20 25m S 1/1100

第四期（嘉永期）伽藍配置図

図4　時期別伽藍配置図（2）　（※各建物・部屋の名称は絵図等を元に記入）

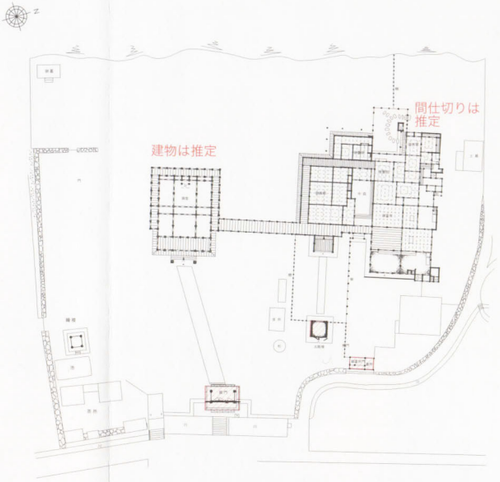


第五期（明治期）伽藍配置図

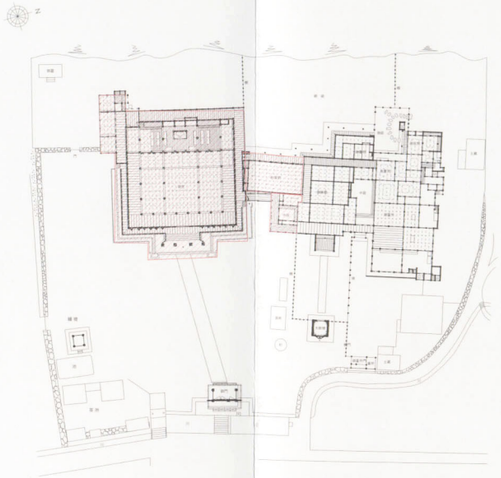


第六期（大正期）伽藍配置図

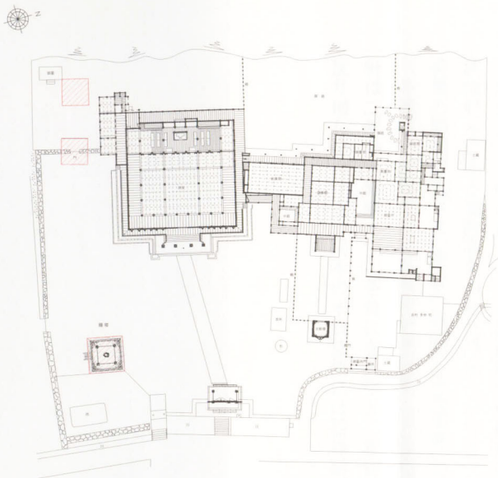
図5　時期別伽藍配置図（3）　（※各建物・部屋の名称は絵図等を元に記入）



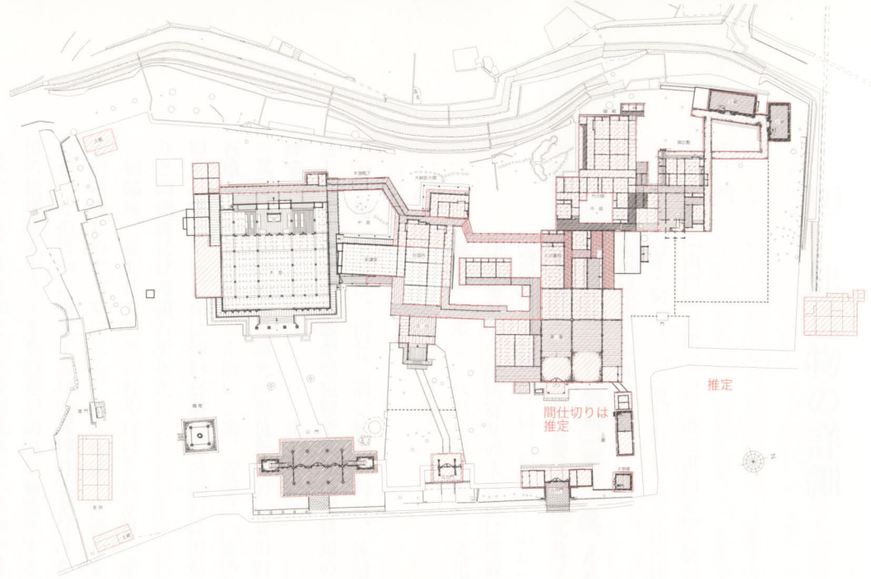
1.第一期（享保期）伽藍配置図



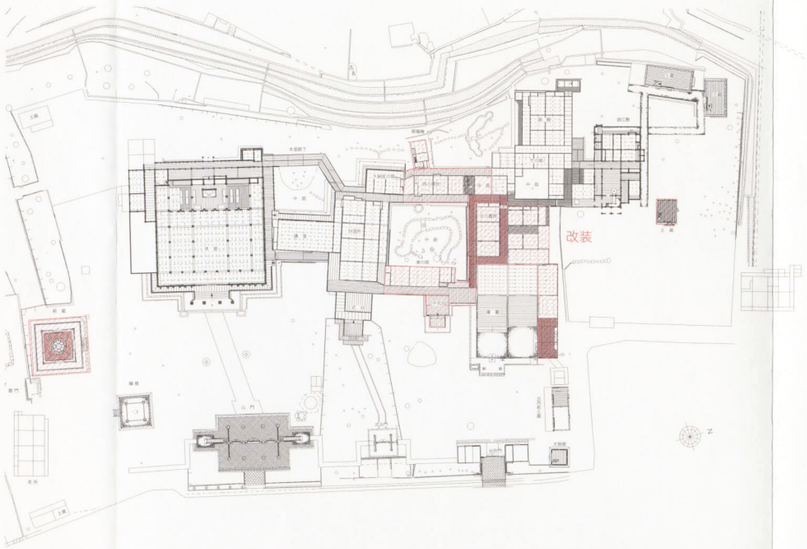
2.第二期（宝暦期）伽藍配置図



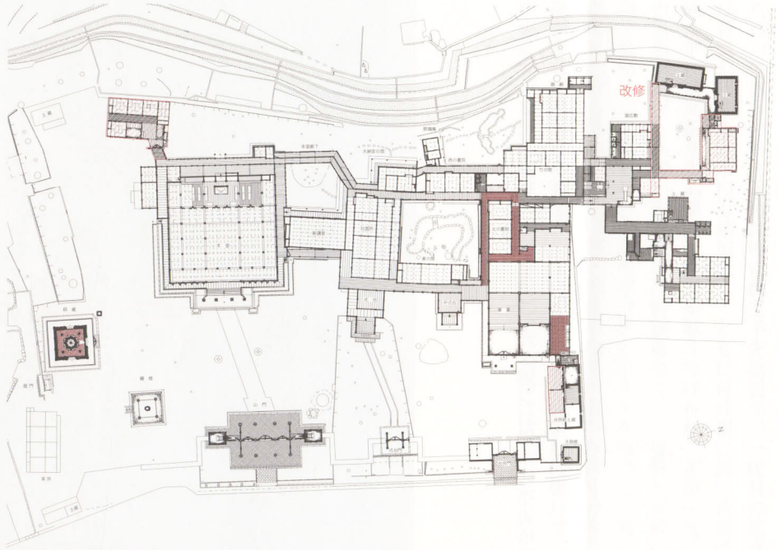
3.第三期（寛政期）伽藍配置図



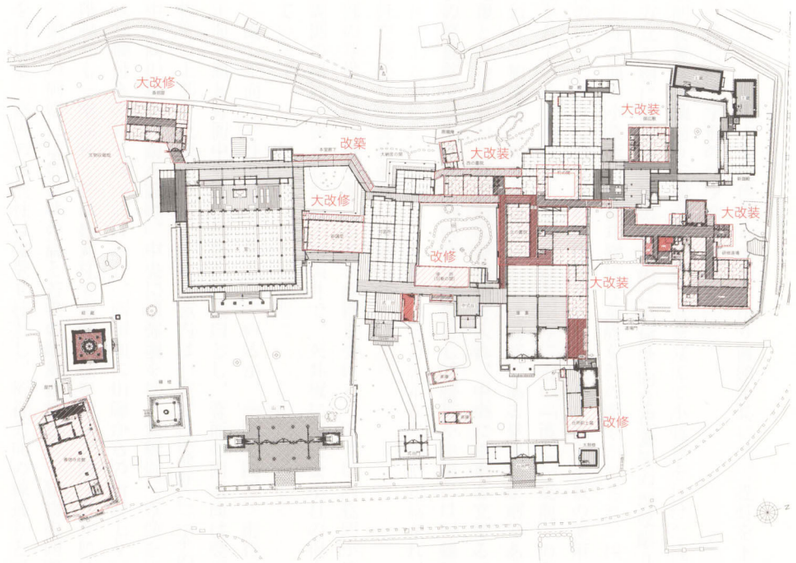
4.第四期（嘉永期）伽藍配置図



5.第五期（明治期）伽藍配置図



6.善徳寺第六期（大正期）伽藍配置図



7.現状伽藍配置図

図6　境内配置変遷図

0　10　　50m　S　1/1500

・・・新築・増築・改築箇所